

平成24年度臨床研究テーマ成果報告書

| |
|--|
| 診療科（部）名：口腔外科1（制御系） |
| 研究期間：平成24年4月～平成25年3月 |
| 研究課題名：Vestibular flap を用いた硬口蓋閉鎖術術後の治療成績 |
| 研究課題の概要及び成果： [背景] 当科では、口唇裂・口蓋裂患者の良好な顎発育および正常構音獲得のために1歳でファーロー法を用いた軟口蓋形成術を行い1歳6ヶ月に硬口蓋閉鎖術を行う「早期二期的口蓋形成術」を施行しており、その良好な術後成績を報告してきた。近年、さらに低浸襲の手術を行うことによって、より良好な顎発育を獲得することを目的として、口腔前庭部から vestibular flap を挙上し口腔側のライニングに用いる硬口蓋閉鎖術を施行している。本研究では、この Vestibular flap を用いた硬口蓋閉鎖術術後の治療成績を検討した。 [方法] 当科において2003年から2010年の間に当科を受診し、早期二期的口蓋形成術を受けた片側性完全口唇口蓋裂患者および口蓋裂患児計102名を対象とした。対象を vestibular flap 手術を行った症例（VF 群:n=28）、局所歯肉弁を用いて硬口蓋閉鎖術を施行した症例（Control 群:n=39）および1歳時に Furlow 法によって口蓋形成術を受けた口蓋裂単独症例（CP 群:n=34）に分け、1. 上顎歯槽形態の変化、2. 3歳時の摂食時鼻漏発生率、3. 咬合関係および4. 構音障害の有無について比較検討した。 [結果] 1歳時を基準とした時の3歳時口蓋形態を検討した結果、犬歯点間幅径は、VF 群で $99.6 \pm 4.7\%$ 、Control 群 $95.0 \pm 4.3\%$ 、CP 群 $106.1 \pm 4.7\%$ となり、成長率は CP 群 > VF 群 > Control 群であった ($p < 0.05$, oneway-ANOVA)。そのほかの検討項目（口蓋前後径、上顎結節点間幅径）には3群間に統計学的有意差は認めなかった。3歳時の鼻漏発生率に関しては VF 群 4.5%、Control 群 25.6% と VF 群で有意に発生率が少なかった ($p < 0.01$, unpaired t)。3歳時の上下顎咬合関係について、全顎的に正常被蓋を示した症例は CP 群で 70.6%、VF 群では 27.3%、Control 群では 4.0% と 3群間に統計学的有意差を認めた。異常構音の発生率に関しては、VF 群と control 群を比較し統計学的有意差は認めなかった。 [考察] Control 群と比較し VF 群が犬歯点間幅径の成長率において有意に大であったのは、vestibular flap を用いた硬口蓋閉鎖手術が硬口蓋に対し低侵襲であるからだと考えられる。VF 群において認められた非常に良好な3歳時被蓋関係もこれを支持する結果であった。さらに VF 群では摂食時の鼻漏率も軽度であることが明らかとなった。 |
| 上記概要・成果に関連する図表等 |